

「二〇一五年度大会シンポジウム」特集 思想史学の問い方——二つの日本思想史講座をふまえて

思想史学の問い方——二つの日本思想史講座をふまえて——

長 志 珠 絵

二〇一五年度、早稲田大学を会場に行われた日本思想史学会大会シンポジウムの全体タイトルは「思想史学の問い方——二つの日本思想史講座をふまえて」としました。思想史学を問う——ではなく、問い方という問題設定を立てることで、日本思想史研究という営みそのものの持つ学的課題を、改めて検討してみようとする試みです。こうした課題設定の意図は準備段階にあたっては二点ありました。

一つはこの十年ほどの大会シンポジウムを振り返る作業ともに浮上してきた課題です。例えば昨年の大会シンポジウム「死者の記憶」の副題は「思想史と歴史学の架橋」、一昨年はタイトルも「越境する日本思想史」、副題も「思想と文学の垣根越え」、二〇〇八年の副題は「思想史から問う」といった、学際領域研究に意欲的です。加えてそこで選ばれる主題の多様性とは別に、学際研究への試みも含め、日本思想史学の持つ方法論や対象領域の固有性に関わる意図的な模索が顕著であるように見受けられたからです。方法としての思想史は、対象との緊張関係を持ちつつ、ではどのような自覚的な「問い方」を了解事項としてきたのでしょうか。他方でまた本学会はそろそろ五十年という節目に近づきつつあり、戦後のアカデミズムの中での位置づけを考える機会でもあったと考えました。

二つ目には折しも、本会会員が責任編集や執筆陣をはじめ、様々な形で広く関わりを持つ日本思想史を冠する二つの講座がそれぞれ出され、ほぼ完結を迎えつつあったことです（岩波書店『岩波講座 日本思想』全八巻、ぺりかん社『日本思想史講座』全五巻）。この二つの講座は主題別と時代別という、それぞれ編集方針を全く異にするものですが、講座の主旨としてそれぞれ、日本思想史としての「全体」に取り組む試みであるとされています。当然ながら、編集を含めた書き手としての関わりをはじめ、本学会は二つの講座とその成り立ちに密接な関わりを持ってきました。

このような観点から二〇一五年度大会シンポジウムでは、「思想史学の問い方」というやや茫漠としたタイトルを掲げ、他方で、二つの講座を成果とすることで、問題を限定しました。何よりも、両講座が扱う個々の主題や学説史個別実証から少し距離を置いた形で戦後の思想史学の歩みや学的領域主題が成り立つ知的文化的文脈の編まれ方を俯瞰し、〈日本思想史研究の思想史〉として試みた次第です。報告者にはそれぞれ両講座に関わってこられた末木文美士、田尻祐一郎両氏にお願いしました。両講座の責任編集をつとめられた末木氏には、講座そのものに立ち入ってご議論いただくほか、中世思想史を軸に日本哲学史と思想史、あるいは中世近世近代といった領域設定や時期区分に関わるご議論を展開していただきました。また田尻氏には「近世思想史研究」を主題としていただきました。近世思想史研究はご承知のように、戦前からの蓄積を持ち固有性の際立つ領域でもあります。では「近世」および学問としての近世思想史をどのような対象として議論するのか、この点は、今日の学際研究にとどまらず、特に国際的な研究のなかで焦点を結ぶ問題群と考えます。田尻氏のご報告「戦後の近世思想史研究をふりかえる」はこの問題を戦後のアカデミズムの研究史のなかで問題提起するものです。田尻氏の議論はたとえば一九九〇年代以降の新しい潮流として子安宣邦氏の近代知批判や民衆思想史を同時代の学的営為として捉えようとする視点の提起も含まれていますが、こうした観点はいわば内在的な学際研究史としての議論も可能でしょう。

またコメンテーターには、専門領域を共有されつつも、学的潮流としては意識的に若い世代の森新之介氏と高山大毅氏にお願いし、澤井啓一氏から全体へのコメントをいただく構成としました。コメンテーターの皆さ

んには、それぞれの報告への応答をお願いする一方で、両講座への言及もお願いしています。

最後に蛇足ながら、今回、シンポジウム開催にあたっては準備として関係者によるプレシンポジウムの機会を盛夏の首都大学東京にて持ちました。これは大会運営のあり方としては新しい取り組みでもありましたが、必ずしも狭義の専門性を共有していない大会運営委員会としては非常に有意義な試みでもあり、当日に向けての実りある議論にとって重要な機会であったと自負しています。

（神戸大学教授）